

脳梗塞の広がり 抗うつ剤が抑制 阪大で動物実験

大阪大学の工藤喬教授らは、既存の抗うつ剤が脳梗塞の治療に役立つ可能性があることを突き止めた。人為的に脳梗塞を起こしたマウスを使った実験で、抗うつ剤を投与すると脳梗塞になる部位が半分ほどになり、病態部の広がりを予防できた。他の疾患にも効果があるか研究を続ける。

大阪府立急性期・総合医療センターの近江翼医師と共同で実施した。工藤教授らは、細胞内でたんぱく質の合成などにか

かわる「小胞体」に注目。小胞体が機能異常になると、脳梗塞やアルツハイマー病、パーキンソン病などが起こりやすいとされる。今回、小胞体の機能に関わるたんぱく質を調べる過程で、「フルボキサミン」という抗うつ剤に注目した。

フルボキサミンが存在すると、「アポトーシス」と呼ばれる細胞が自ら死滅する現象が抑制された。通常は4割ほど起きるところ、1割に低下した。脳梗塞を起こしたマウスで実験、病態部が広がることを抑制できた。

小胞体の機能に関わるたんぱく質を活性化したことが原因とみられる。小胞体の機能異常に関わる他の疾患にも適用できるとみている。

「科学技術」は火曜日に掲載します。